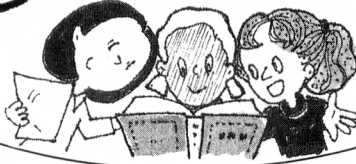


英国助産婦学生日記

その2



大学入学準備

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

1999年3月末 合格通知のあと

大学から届いた内定通知に入学する意思を伝えると、入学の9月までに処理するべきものもろの書類が送られてきた。ユニフォームの注文書、大学寮の案内、健康診断書(風疹、ポリオ、B型肝炎等予防接種の記録を含む)、警察証明の同意書(助産コースは乳児と接するため、犯罪歴によって入学できないことがある)、奨学金*の申請書、それに最初の宿題「解剖生理学のワークブック」等々。

届いた書類を前にして、一気に留学が現実のものに感じられ、あと数か月で本当に始まるんだ、と不安と焦りにおそわれた。留学生が少なそうなコースの授業に果たしてついていけるか。1度しか(しかも面接のためにしか)行ったことのない、友人もほとんどいない英国で3年間やっていけるだろうか。しかもまた学生の身分で。

心配しても仕方がない、まず一番不安な語学をなんとかしたい、と思い直して、日本にいる間もやれる勉強をしておこう、と「英文小論文の書き方コース」(週2回3か月)に通い始めた。短期間だったけれど、それまでアカデミックな文章を書いたことがなかったので、このコースは小論文の書き方を基礎から勉強するよい機会になった。

1999年4月末 住むところ

そのころシャメリーからeメールが届いた。「大学のそばに引っ越す計画を立てて物件を探して

いるんだけど、同居してみる気はない？」

シャメリーとは、サリー大学の面接会場で知り合った。イギリス人ばかりの入学希望者の中で気後れしていた私に話しかけてきてくれて、休憩時間や待ち時間に私がおしゃべりできた唯一の人だった。同い年だったせいか、やはり人生の転機を考えて面接に臨んでいるという同じ境遇、それに2人の持っている「理想の助産婦像」がとても近くて、この人が同級生にいてくれたら心強い、と感じた人だった。だからその後もeメールで連絡を取って、2人とも無事合格したことを喜んでいたところだった。

シャメリーは夫と2人ロンドンに住んでいて、入学を機に、大学のある、都心から50kmほど離れたサリー州に引越しをしようと家を探していた。「せっかく郊外に住むのだから庭が欲しいし……でも、家賃が高くて、もう1人同居人がいると助かるんだけど、どうかしら？ それに勉強仲間がいたらお互い心強いし」。

面接会場で一度会っただけでお互いを知らないのに、シャメリーにとってわたしは「気楽に付き合えそうな人」に映ったらしい。私にとって彼女の印象は「元ダンサーだけあってかっこよくて、ハローキティが好きなかわいい人」だった。ただし条件が1つ、シャメリーと夫は肉食主義者なので、家の中では肉魚類を料理しないこと。私はベジタリアンではないけれど、たぶん、肉・魚なしでもやっていけるだろう、とこれはクリアした。

10代で2度日本に来たことがある親日家(?)

だとしても、同居人をと考えて留学生の私を選ぶなんて、変わっている。しかもメールの交換でわかったのだけれど、「ヨガと瞑想が趣味で、インドのスピリチュアルグループに入っている」らしい。自分ひとりではこの同居を決心できず友人たちに「どう思う？」と意見を聞いてみた。「心配していてもしかたないから、まずは一緒に住んでみて、だめだったら出ればいいじゃない」「学校でも家でも一緒というのは、お互い細かいところまで見えてかなりつらいかもよ。Good luck!」

やはり、大学寮とあまり変わらない予算で庭付き一軒家というのは大きかった。しかも寮と違って、台所、トイレ、お風呂を学生10人前後と共有することもないし、隣の部屋の音楽やパーティに邪魔されることもないというのは、大きな魅力だった。

「歳を取った夫婦ならまだしも、若いカップルとの同居はいけないわよ」と忠告してくれる人もいたけれど、語学面からまずハンディのある身には、近くに勉強仲間がいることは最大のメリットになると判断して、同居を決めた。近すぎてキツくなりそう、という不安は残ったけれど。

1999年夏 夏期講座

7月に渡英して2か月間、ロンドンで「留学生のための準備コース」に通った。「準備コース」は秋の新学期にイギリスの大学へ進む外国人学生を対象に、夏休みに多くの大学の語学センターが開いているもので、英国の大学のやり方に慣れるための準備期間になる。講義についていかれるように、課題に取り組めるように、聞き取り、ノートを取り方、読解、文法、小論文の書き方といったカリキュラムが組んである。

サリー大学でも同じものはあるのだけれど、3週間の短期間コースのみでそれだけでは物足りなく不安だったので他大学をあたって、通常の授業以外に看護保健関係のワークショップもある「キングスカレッジ」を選んだ。週1回特別講師を招いての講堂での講義もあり、毎回違っ



キングスカレッジ「留学準備コース」の同級生たち。
左から3人目の上段にいるのが筆者

たテーマの講義が大学の本番に近い臨場感で楽しめた。また、月に一つ自分のプロジェクトを決め小論文とプレゼンテーションをする、という課題はかなり大変でストレスにもなったけれど、実践的でよい練習になった。

学生の中には、大学から「内定通知」は受け取っていても、英語力が入学基準に達していないため、この準備コースの成績次第で内定を取り消されてしまう人がかなりいた。私のクラスでは11人中4人が「B+」か「A」の成績を取らないといけなかったもので、みな気合いが入っていた。そんな中で、週1度の担任との個人面談は、細かいケアがありがたかった。それに、2か月も付き合うと学生同士親しくなり、とても居心地のいい空間になっていた。このため、9月からのサリー大学でのイギリス人との学生生活を思うと、かえって不安を覚えるほどだった。このクラスの大半がそのままキングスカレッジの修士課程に進むことになっていたのも、1人サリーに離れていくのはさみしい気分になっていた。

*奨学金について

奨学金はディプロマコースの学生全員に無条件でNHS (National Health Service)から支給される。授業料が免除の上、学生は基本年額4805ポンドを受け取る。それに26歳以上の学生には、mature student手当てとして605ポンドが増額される。また扶養義務のある子供がいる場合や、シングルペアレントにも子供の人数、年齢によって手当てがプラスされる。反対に、パートナーに収入がある／親と同居しているという学生は減額対象になる。